

令和元年6月12日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03159

研究課題名(和文) ラトナーカラシャーンティの『般若波羅蜜多論』新出梵語テキストの研究

研究課題名(英文) A Study of the Sanskrit Text of Ratnakarasanti's Prajnaparamitopadesa

研究代表者

桂 紹隆 (Katsura, Shoryu)

龍谷大学・公私立大学の部局等・フェロー

研究者番号：50097903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,800,000円

研究成果の概要(和文)：後期瑜伽行唯識派のラトナーカラシャーンティ(11世紀)の『般若波羅蜜多論』梵語写本を四川大学の羅鴻教授が校訂したテキストの和訳を完成した。ラトナーカラシャーンティは、認識に現れる対象の形象は虚偽であるという「形象虚偽論」の立場をとり、同時代のジュニャーナシュリーミトラの「形象眞実論」を鋭く批判している。認識の形象は眞実か否かという問題に関して先行する議論を理解するため、「形象眞実論」と「形象虚偽論」をともに否定する中観派ハリバドラ(8世紀)の『現觀莊嚴光明論』の第16章の和訳を完成した。2017年にトロント大学で開催された国際仏教学会で「『般若波羅蜜多論』の新研究」というパネル発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラトナーカラシャーンティはインド仏教最後期を代表する仏教学者であり、彼の瑜伽行唯識思想の綱要書『般若波羅蜜多論』の梵語原典からの研究は、インド仏教思想史の展開を解明する上で重要な意味を持っている。今後、同書の和訳研究を公刊することにより、仏教学界のみならず、仏教思想に関心をもつ一般読者にも貢献できると考える。

また、この研究プロジェクトを通じて、若手研究者を育成すると同時に、海外の研究者との交流を深めたことは、今後の我が国の仏教学界の発展に多少なりとも寄与する点があると信じる。

研究成果の概要(英文)：Prof. Luo Hong edited the Sanskrit manuscript of Prajnaparamitopadesa of Ratnakarasanti, 11th century Buddhist scholar of Yogacara-vijnanavada school. We completed Japanese translation of his edition. Ratnakarasanti took the position that the objective images of a cognition are not real (alikalavada) and severely criticized his contemporary Jnanasrimitra who held that the objective images of a cognition are real (satyakaravada). In order to understand the preceding arguments on the reality or unreality of the images of a cognition, we read the 16th chapter of Abhisamayalamkaraloka of Haribhadra (8th century) and completed Japanese translation. We presented the results of our research at the 19th Congress of International Association of Buddhist Studies held at the University of Toronto in August, 2017.

研究分野：インド哲学・仏教学

キーワード：Ratnakarasanti 般若波羅蜜多論 後期唯識思想 形象眞実論 形象虚偽論 Haribhadra 現觀莊嚴光明論 中観思想

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ラトナーカラシャーンティ(970-1030頃)は、インド仏教最後期の代表的な仏教学者の一人であり、ヴィクラマシーラ寺院の4本柱の一つと讃えられ、顕教・密教両方に通じた巨匠であったが、彼の著作の多くは、チベット語訳でしか存在せず、ながら現代の仏教学界ではその思想が明らかにされて来なかった。当時のもう一人の代表的な仏教学者であったジュニャーナシュリ-ミトラの著作集は、彼の弟子であるラトナーキールティの著作集とともに、チベットの僧院でラフラ・サーンクリティヤヤーナが撮影した梵語写本にもとづいて、第二次大戦後はやくに公刊され、その研究が進められてきたが、彼の主たる批判の対象であったのがラトナーカラシャーンティであることを発見したのは、海野孝憲教授であった。彼はその後、ラトナーカラシャーンティの瑜伽行唯識関係の主要な著作をチベット語訳から翻訳・研究し、公刊している。一方、海野教授の発見に刺激を受けた、梶山雄一教授はインド仏教最後期に「認識の形象の有無」をめぐる論争があったことを明らかにする英文論文を公表した。その後、1970年代後半に彼の弟子たちは、一郷正道教授を中心『般若波羅蜜多論』(Prajñāpāramitopadeśa)のチベット語訳の輪読会を行い、全編を和訳した上で、その成果を研究発表した。

その後、梵語写本が存在するラトナーカラシャーンティの密教文献や般若経注釈書の研究が進められてきたが、1990年代になると北京の蔵学研究中心から様々な仏教文献の梵語写本の存在が報告されるようになり、その中にラトナーカラシャーンティの『般若波羅蜜多論』があった。同研究所の羅鴻博士は、その写本(二種)の解説・校訂・英訳を試みていたが、研究代表である桂は、彼を龍谷大学に二度招聘し、彼の校訂と翻訳の改善を試みた。羅博士は、その後、ウィーン大学やハンブルク大学を訪れ、シュタインケルナー教授やシュミットハウゼン教授の指導を受け、同書の校訂・翻訳のさらなる改善を行ってきた。一方、海外では、ハンブルク大学のアイザックソン教授を中心に、ラトナーカラシャーンティへの関心が高まり、彼を主題とする博士論文が、近年少なくとも三つ提出されている。

以上が、研究開始当初のラトナーカラシャーンティをめぐる研究状況であった。本研究は羅博士の校訂本を批判的に検討した上で、それからの初めての和訳研究を試み、最後のインド仏教思想への学界全体の理解の深化に貢献しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ラトナーカラシャーンティの唯識学綱要書『般若波羅蜜多論』の新出梵語テキストを研究することにより、大乘仏教の二大学派である中観派と唯識派とが教理的対決を維持しつつ実践的共通点を見いだそうとした、後期インド仏教の実相を明らかにすることにある。同書は従来チベット語訳でしか研究することが出来なかったが、中国蔵学研究中心の羅鴻博士(現在、四川大学)から提供された梵語校訂テキストにより、ラトナーカラシャーンティの唯識思想の正確な理解が得られる。彼が影響を受け、あるいは批判の対象とした、仏教内外の諸学派を研究する者が共同研究することにより、思想史の視点からラトナーカラシャーンティを正確に位置づけることを目指す。

3. 研究の方法

学期中には、京都在住の研究者を中心に隔週で『般若波羅蜜多論』の輪読会を開催した。さらに夏や春の長期休暇中は、京都以外の研究者が参加出来る集中研究会を開催した。輪読会では、毎回、龍谷大学の大学院生・研究生を中心に若手研究者が和訳と、関連する文献へのレファレンスを集めた「研究ノート」を準備した。それを出席者全員が検討し、より正確な和訳を作成するように務めた。その成果は、毎回本プロジェクト参加者及び関係者全員にメールで配布し、意見を求めた。

『般若波羅蜜多論』の校訂者である羅鴻博士を2019年2月に京都へ招聘して、同書の難解な箇所を解釈を交換し、互いに理解を深めることができた。

2016年度に『般若波羅蜜多論』の和訳を完成したあとは、研究協力者の一郷正道教授が近年和訳研究を出版したハリバドラの『現観莊嚴光明論』第16章の中でシャーンタラクタの「離一多性論証」を解説する部分を輪読し、その成果を『般若波羅蜜多論』と同様に関係者全員にメールで配布した。これも2018年度中に読み終えることができた。

研究成果を多くの研究者に公開し、フィードバックを得るために、東京大学の斎藤明教授(現在、国際仏教学大学院大学教授)が始めた「中観研究国際ワークショップ」に参加し、研究発表した。同ワークショップは、2015年東京大、2016年龍谷大、2017年浙江大、2018年国際仏教学大学院大学で開催され、本年度は龍谷大で開催される。

同じ目的から、2017年トロント大学で開催された国際仏教学会では『般若波羅蜜多論』の新研究」というパネルを開催し、桂紹隆・片岡啓・志賀浄邦・西山亮・早島慧が研究発表した。

研究代表者の桂は、2017年3月タイのマヒドン大学で開催された「ジュニャーナシュリーミトラ研究会」で『般若波羅蜜多論』の概要とジュニャーナシュリーミトラとの論争部分の紹介を行った。

一方で、海野孝憲教授・Greg Seton教授など、内外のラトナーカラシャーンティの研究

者を招聘し、研究発表をして頂くと同時に、互いに学術情報を交換した。

4. 研究成果

『般若波羅蜜多論』の和訳・研究は、龍谷大学叢書として、研究協力者である早島慧（龍谷大学講師）を編集責任者として出版する。

『現觀莊嚴光明論』第 16 章の和訳・研究は、研究代表者が編集・刊行している学術誌『インド学チベット学研究』に順次公表していく予定である。

2017 年の国際佛教学会でのパネル発表の成果は、『インド学チベット学研究』の第 22 号に公表している。すなわち、

桂紹隆 Four Yoga Stages in Ratnākaraśānti's *Prajñāpāramitopadeśa*— with a new synopsis —

片岡啓 Ratnākaraśānti on Prakāśa

志賀浄邦 Common scriptural sources cited by Ratnākaraśānti and Kamalaśīla

西山亮 Mādhyamikas in the *Prajñāpāramitopadeśa*

早島慧 The Influence on *Prajñāpāramitopadeśa* by the Literatures of the Early Yogācāra: Focusing on the Theory of Three Natures (*Trisvabhāva*)

研究代表者の桂は、かつて『般若波羅蜜多論』のチベット語訳を一郷正道教授らと読了したとき、同書のシノプシスを英文で発表したが、今回は同書の梵語テキストの読了にもとづいて新しい、より詳細かつ正確なシノプシスを作成した。さらに、同書は単なる後期瑜伽行唯識学派の理論的綱要書であるばかりでなく、後期仏教徒の瞑想法のマニュアルとして利用されたことが想像される。その瞑想法の概要を明らかにした。最後に、後期インド仏教思想の主要 4 派である、毘婆沙師（説一切有部）、經部、瑜伽行唯識派、中觀派の「認識の形象」に関する理解を整理して提示した。特に瑜伽行派と中觀派に関しては、複数の立場があることも示した。

ミーマーンサー研究者である片岡啓氏は、ラトナーカラシャーンティによる、ミーマーンサーやニヤーヤなどのインド哲学諸派、毘婆沙師・經部・中觀派などの仏教哲学諸派の「認識形象論」に対する批判を精査することによって、彼の「形象虚偽論」の本質を明らかにしている。

仏教認識論・論理学の研究者である志賀浄邦氏は、ラトナーカラシャーンティが後期中觀派の巨匠であるシャーンタラクシタ・カマラシーラ師弟と同じ典拠引用することに着目し、前者が後者の著作から「孫引き」している可能性を示唆している。さらに、ラトナーカラシャーンティが中觀派とは異なる經典解釈にもとづき独自の「認識＝輝き（プラカーシャ）のみ」という理論を構築したことを明らかにしている。

中觀派の研究者である西山亮氏は、『般若波羅蜜多論』に言及される三つの中觀派について、歴史的に中觀派内のどの学匠と同定出来るかという、これまで未決定であった問題に取り組み、妥当な結論を導きだしている。

伝統的瑜伽行唯識学派の研究者である早島慧氏は、ラトナーカラシャーンティが古典的な瑜伽行派の文献にいかにか依存しているかを明示した上で、「三性説」の解釈に関しては、『中辺分別論』に強く依存していることを明らかにしている。

最後に、本プロジェクトの成果の一つとして、研究協力者である若手研究者を積極的に海外の大学に送り出し、国際学会で発表させることにより、かれらが一人前の仏教研究者として成長していく手助けができたことをあげておく。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 23 件)

桂紹隆

(1) Four Yoga Stages in Ratnākaraśānti's *Prajñāpāramitopadeśa*— with a new synopsis — 『インド学チベット学研究』 22 (2019) 印刷中

(2) The Mode of Argumentation in the Fangbian xin lun/*Upāyahṛdaya, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, 56-57 (2015-2018): 19-36.

(3) ブッダの教え—これあれば、彼あり。これなければ、彼なし— 武蔵野大学日曜講演会講演集「心」 38 (2019): 12-26

(4) 龍樹の仏陀觀—『根本中頌』に登場する「単数形のブッダ」と「複数形のブッダ」— 『駒澤大学祝祷文化講演集』 19 (2018): 39-56.

(5) English Translation of the *Upāyahṛdaya*” (pt. 1), (Brendan Gillon と共訳) 『インド学チベット学研究』 20(2016): 195-232.

(6) 仏教研究の最前線～龍谷大学から世界へ～ 『仏教文化研究所紀要』 54 (2016): 162-180

(7) A Report on the Study of Sanskrit Manuscript of the *Pramāṇasamuccayaṭīkā* Chapter 4: Recovering the Example Section of the *Nyāyamukha* 『印度学仏教学研究』 64-3

(2016): (195)-(203) 査読有

能仁正顕

- (8) 大乘仏教の展開と仏説論 『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第31号(2018): 43-61
- (9) 般舟三昧経と仏説をめぐる諸問題 2016年度『勸学寮例会研究紀要』(2017): 1-17
- (10) Masaaki Nohnin, Kaoru Onishi, and Takahiko Kameyama, The Chapter on the Kusha Tradition of *A Description of the Eight Traditions: A Translation and Annotation* (Revised Edition, 2016), *Journal of World Buddhist Cultures ~ Inaugural preparatory issue~*, 51-89, (2016).

吉田哲

- (11) ディグナーガによるサーンキヤ知覚説批判の特徴：その批判方法を中心として 『印度学仏教学研究』64-2(2016): 939-933 査読有

片岡啓

- (12) Ratnākaraśānti on Prakāśa 『インド学チベット学研究』22(2019) 印刷中、査読有
- (13) 有形象認識論の形象は非真実か? 『印度学仏教学研究』67-1(2018): 147-154 査読有
- (14) 自己認識の生成・背景・変質 『南アジア古典学』12(2017): 191-214 査読有
- (15) パラフレーズによる *abhūtaparikalpa* の構造分析 『インド論理学研究』10(2017): 25-41
- (16) スチャリタミシュラのアポーハ論理解 —Kasika ad Slokavarttika apoha v. 1 前主張の和訳— 『哲学年報』75(2016): 55-107
- (17) ディグナーガによる不排除と包摂の意味論 『印度学仏教学研究』65-1(2016): (130)-(137) 査読有
- (18) アポーハの遍充把握—ディグナーガとクマーリラー— 『印度学仏教学研究』64-1(2015): (75)-(81) 査読有

護山真也

- (19) ラトナキールティ著『主宰神証明の論駁』和訳研究(中) 『南アジア古典学』10(2015): 143-171 査読有

志賀浄邦

- (20) Common scriptural sources cited by Ratnākaraśānti and Kamalaśīla 『インド学チベット学研究』22(2019) 印刷中、査読有
- (21) Tattvasaṃgraha および Tattvasaṃgrahapañjikā 第21章「三時の考察(Traikālyaparīkṣā)」校訂テキストと和訳(kk. 1809-1855) 『インド学チベット学研究』20(2016): 76-130 査読有
- (22) An Objection in the Hetubindu ascribed to the Jainas 『印度学仏教学研究』64-3(2016): 1262-1255 査読有
- (23) Tattvasaṃgraha および Tattvasaṃgrahapañjikā 第21章「三時の考察(Traikālyaparīkṣā)」校訂テキストと和訳(kk. 1785-1808) 『インド学チベット学研究』19(2015): 158-209 査読有

[学会発表] (計 20 件)

桂紹隆

- (1) ブッダの教え—此れあれば、彼あり。此れなければ、彼なし— 第600回 武蔵野大学日曜講演会 2018年
- (2) The Four Yoga Stages of the Prajñāpāramitopadeśa 第18回国際仏教学会 トロント大学 2017年
- (3) “Bhāviveka’s Proof Formulae Estimated by Dignāga’s Logic”, International Workshop on Bhāviveka and Buddhist Logic”, 浙江大学、2017.7.23
- (4) Outline of the Prajñāpāramitopadeśa of Ratnākaraśānti ジュニャーナシュリーミトラ研究会、マヒドン大学、タイ 2017年
- (5) The Two Traditions of Indian Logic: *Vāda* and *Pramāṇa*”, International Seminar On Logic, Ethics & Epics: Homage to Professor Bimal Krishna Matilal, 2016.12.27.
- (6) 龍樹の仏陀観—ブッダ(達)は何を説いたか 駒沢大学成道会記念講演 2016年
- (7) Did the Buddha teach any dharma according to Nāgārjuna? Buddhist Studies Workshop Lecture, Princeton University 2016年
- (8) Arthasaṃvedana and svasaṃvedana in Buddhist epistemological tradition

Buddhist Philosophy of Consciousness: Tradition and Dialogue 2016年3月11日
台湾国立政治大学

- (9) 『集量論複注』第4章研究の現状 日本印度学佛教学会第66回学術大会 2015年9月20日 高野山大学
- (10) Kumāraīva, Bhāviveka, and Candrakīrti on “Seeing without Seeing.” International Workshop on Bhāviveka vs. Candrakīrti 2015年8月26日 東京大学

吉田哲

- (11) 修道論から見た仏教の人間観 日本仏教学会第86回学術大会 2016年
- (12) ディグナーガによるサーンキヤ知覚説批判の特徴—その批判方法を中心として— 日本印度学佛教学会第66回学術大会 2015年09月20日 高野山大学

片岡啓

- (13) 有形象認識論の形象は非真実か？日本印度学仏教学会 2018年
- (14) Ratnākaraśānti on Prakāśa 第18回国際仏教学会 トロント大学 2017年
- (15) ディグナーガによる不排除と包摂の意味論 日本印度学仏教学会第67回学術大会 2016年
- (16) tadvat と apohavat—限定関係をめぐるディグナーガとクマーリラの一議論— インド思想史学会 2015年12月19日 京都大学
- (17) アポーハの遍充把握—ディグナーガとクマーリラ— 日本印度学佛教学会第66回学術大会 2015年09月20日 高野山大学

護山真也

- (19) An analysis of svalakṣaṇa in Dharmakīrti's Philosophy, International Workshop on Buddhist Ontology 2018年

志賀浄邦

- (19) On Some Common scriptural sources cited by Ratnākaraśānti and Kamalaśīla 第18回国際仏教学会 トロント大学 2017年
- (20) antarvyapti and bahirvyapti re-examined, Indo-Chinese Cultural Relations through Buddhist Path of Transcendence 復旦大学 2016年

〔図書〕(計 3 件)

桂紹隆

- (1) 龍樹『根本中頌』を読む(五島清隆と共著) 春秋社 2016年、全418ページ

能仁正顕

- (2) 般舟三昧経序説 永田文昌堂 2018年 全250ページ

一郷正道

- (3) ハリバドラの伝える瑜伽行中観派思想 東本願寺出版 2015年、全129ページ

〔その他〕

ホームページ等

インド哲学研究会 <http://www.jits-ryukoku.net/> にアップされている『インド学チベット学研究』誌第21号、第22号に研究成果の一部を掲載している。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：能仁 正顕

ローマ字氏名：Nonin Masaaki

所属研究機関名：龍谷大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：70290210

研究分担者氏名：吉田 哲

ローマ字氏名：Yoshida Akira

所属研究機関名：龍谷大学

部局名：経済学部

職名：准教授

研究者番号 (8桁) : 00644080

研究分担者氏名 : 片岡 啓

ローマ字氏名 : Kataoka Kei

所属研究機関名 : 九州大学

部局名 : 人文科学研究科 (研究院)

職名 : 准教授

研究者番号 (8桁) : 60334273

研究分担者氏名 : 護山 真也

ローマ字氏名 : Moriyama Shinya

所属研究機関名 : 信州大学

部局名 : 人文学部

職名 : 准教授

研究者番号 (8桁) : 60467199

研究分担者氏名 : 志賀 浄邦

ローマ字氏名 : Shiga Kiyokuni

所属研究機関名 : 京都産業大学

部局名 : 文化学部

職名 : 准教授

研究者番号 (8桁) : 60440872

(2)研究協力者

研究協力者氏名 : 一郷 正道

ローマ字氏名 : Ichigo Masamichi

研究協力者氏名 : 早島 理

ローマ字氏名 : Hayashima Osamu

研究協力者氏名 : 沖 和史

ローマ字氏名 : Oki Kazufumi

研究協力者氏名 : 早島 慧

ローマ字氏名 : Hayashima Satoshi

研究協力者氏名 : 西山 亮

ローマ字氏名 : Nishiyama Ryo

研究協力者氏名 : 羅 鴻

ローマ字氏名 : Luo Hong

研究協力者氏名 : 間中 充

ローマ字氏名 : Kenchu Mitsuru

研究協力者氏名 : Vo Thi Van Anh

ローマ字氏名 : ヴォ・ティ・ヴァン・アン

研究協力者氏名 : 秦野 貴生

ローマ字氏名 : Hatano Kisho

(その他、4名)

※ 科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。